

『D.H.ロレンス研究』第31号刊行に代えて

2021年3月に刊行する予定にしていた『D.H.ロレンス研究』第31号は、下記の「投稿論文講評」に述べられているように、査読を経て掲載論文なしとの結果になったこと、コロナ禍での変則的な授業対応で多忙な先生方に書評の執筆というさらなる負担を強いるのを回避すること、そして2020年6月に開催予定だった全国大会の対面での実施が不可能となり研究発表のみをオンラインで実施したためシンポジウムとワークショップの成果が載せられなくなってしまったことから、2020年度中の刊行は見送って、2021年度末に第31号・第32号の合併号として刊行することを協会として決定いたしました。

ここには、本来であれば第31号に掲載される予定だった「大会報告」、2019年9月から2020年8月の期間を対象とする「ロレンス研究文献」、論文の投稿を受けて開かれた編集会議の結果をまとめた「投稿論文講評」と編集委員長による「編集後記」を録することにして、第31号の刊行に代えるものとします。

日本ロレンス協会第51回大会報告

【ヴァーチャル研究発表】

*Lady Chatterley's Lover*における男性性の再生

——D. H. ロレンスの教育哲学の検討

杉野 久和（京都大学大学院生）

本発表では、*Lady Chatterley's Lover*をロレンスの教育哲学から読み解く試みを提示した。ロレンスは、学校教員として働いていただけでなく、教育学的論考もいくつか執筆している。“Education of the People”では、教育による“unmanliness”が言及されており、*Fantasia of Unconscious*における“First Steps in Education”でも、学校教育に関して“no longer a man”と述べられている。そして、この元凶として、“ideal”や“idealism”が繰り返し批判されている。

この関係性は、理想主義者であり高学歴のクリフォード、学校教育において優等生であ

ったメラーズとして表現されている、と本発表では述べた。前者が、下半身不全で現実から目を背け続け、妻コニーから別れを告げられる一方で、後者は、現実を直視し、学校教育的ともいえる標準語を廃し、学校教育では受け入れられ難い猥亵表現を土着語で語り合うという行為へ到り、コニーに身体的な快感を与えていた。

作品執筆直後のロレンスは、本作について“phallic reality”だと述べている。即ち、本作品は、学校教育における理想主義によって生じる“unmanliness”から脱却する物語——“manliness”再生の物語——として解釈できるのではないか、と本発表は結論づけた。

Women in Love の ‘The Industrial Magnate’ に見る、レフ・トルストイへの応答

大江 公樹（早稲田大学大学院生）

本発表は *Women in Love* 第十七章の‘The Industrial Magnate’における、D.H.ロレンスのレフ・トルストイに対する応答について検討した。ロレンスは青年期から晩年に至るまでトルストイの著作を繰り返して読み、意識し続けた。*Women in Love* もそのやうな姿勢を見出すことができる作品の一つである。第十七章には炭坑主トマス・クライチが登場するが、クライチは「常に自分の信念、慈善と隣人への愛に忠実」であり、労働者に崇拝の念を抱く人物として描かれる。このやうな描写は、ロレンスによる後年の評論 “The Novel” における「吐き気を催させる自己流キリスト教同胞主義の学者」といふトルストイ評、またロレンスがトルストイの小説の中でも特に関心を持つてゐた『アンナ・カレーニナ』に登場する貴族レーウィンの、農民を救ひ上げようとする態度と重なる。トマス・クライチの描写を、『アンナ・カレーニナ』におけるレーウィンの描写と比較考察することで見えてくるのは、理想を追ひ求めるトルストイに対して、自らを取り囲む現実を出発点に批判を向けるロレンスの姿である。その上で、*Women in Love* におけるトルストイへの応答は消極的なもので、*Lady Chatterley's Lover* で示されるより積極的な応答への発展段階にあるものと言へると指摘した。

ロレンス研究文献
(2019年9月～2020年8月)

(日本在住の研究者あるいは国内出版の英語文献)

Bell, Michael, (論文) “Lawrence, the Academy and the Idea of the Aesthetic,”『D. H. ロレンス研究』第30号 (日本ロレンス協会), 2020年3月.

Itaya, Yoichiro, (論文) “A Narratological Approach to D. H. Lawrence’s ‘Daughters of the Vicar,’”『人文学紀要』第94巻 (中央大学人文科学研究所), 2019年9月.

Matthews, Sean, (論文) “T. S. Eliot, D. H. Lawrence, and the Structure of Feeling of Modernism,”『D. H. ロレンス研究』第30号 (日本ロレンス協会), 2020年3月.

Oyama, Miyo, (著書) *Representations of Aggression and Their Dynamics in D. H. Lawrence’s Fiction*. Keisuisya, September 2019.

Rademacher, Marie Géraldine, (書評) “Rachel Crossland, *Modernist Physics: Waves, Particles, and Relativities in the Writings of Virginia Woolf and D. H. Lawrence*,”『D. H. ロレンス研究』第30号 (日本ロレンス協会), 2020年3月.

Sumitani, Yumiko, (論文) “Between the Symbolic and the Semiotic: D. H. Lawrence’s *Kangaroo* and Virginia Woolf’s *To the Lighthouse*,”『阪南論集』第55号 (阪南大学学会), 2020年3月.

Yamada, Akiko, (著書) *The Novellas of D. H. Lawrence: Quest for “a world before and after the God of Love”*. ARM Corporation, 2020.

(日本語文献)

浅井雅志, (書評) 「Miyo Oyama, *Representations of Aggression and Their Dynamics in D. H. Lawrence’s Fiction*」, 『D. H. ロレンス研究』第30号 (日本ロレンス協会), 2020年3月.

飯田武郎, (書評) 「Bill Goldstein, *The World Broke in Two: Virginia Woolf, T. S. Eliot, D. H. Lawrence, E. M. Foster, and the Year That Changed Literature*」, 『D. H. ロレンス研究』第 30 号 (日本ロレンス協会), 2020 年 3 月.

井川ちとせ, (論文) 「情動と『多元呑氣主義』——ポストクリティックの時代に D. H. ロレンスを読む——」, 『言語文化』第 56 号 (一橋大学語学研究室), 2019 年 12 月.

石原浩澄, (書評) 「David Ellis, *Memoirs of A Leavisite: The Decline and Fall of Cambridge English*」, 『D. H. ロレンス研究』第 30 号 (日本ロレンス協会), 2020 年 3 月.

井出達郎, (論文) 「偶有性への触発 : D. H. ロレンスとキメラの象徴」, 『東北学院大学英語英文学研究所紀要』第 45 号 (東北学院大学英語英文学研究所), 2020 年 3 月.

井上義夫, (論文) 「D. H. ロレンスの伝記資料とその収集」, 『D. H. ロレンス研究』第 30 号 (日本ロレンス協会), 2020 年 3 月.

大江公樹, (論文) 「『息子と恋人』におけるモレル夫人の描写 : 後のロレンスの思想との呼応」, 『英文学』第 106 号 (早稲田大学英文学会), 2020 年 3 月.

大平章, (書評) 「Peter Balbert, *D. H. Lawrence and the Marriage Matrix*」, 『D. H. ロレンス研究』第 30 号 (日本ロレンス協会), 2020 年 3 月.

加藤彩雪, (書評) 「Andrew F. Humphries, *D. H. Lawrence, Transport and Cultural Transition: 'A Great Sense of Journeying'*」, 『D. H. ロレンス研究』第 30 号 (日本ロレンス協会), 2020 年 3 月.

倉持三郎, (編著) 『写真版 D. H. ロレンスの書簡, 詩とエッセイの原稿, 並びにフリーダの書簡』, 光陽社, 2020 年.

倉持三郎, (編著) 『写真版 D. H. ロレンスの恋人, ジェシー・チェインバーズの書簡』, 光陽社, 2020 年.

田島健太郎, (書評) 「Andrew Harrison ed., *D. H. Lawrence in Context*」, 『D. H. ロレンス研究』第 30 号 (日本ロレンス協会), 2020 年 3 月.

巴山岳人, (書評) 「Indrek Männiste, ed., *D. H. Lawrence, Technology, and Modernity*」, 『D. H. ロレンス研究』第30号 (日本ロレンス協会), 2020年3月.

武藤浩史, (書評) 「Susan Reid, *D. H. Lawrence, Music and Modernism*」, 『D. H. ロレンス研究』第30号 (日本ロレンス協会), 2020年3月.

諸戸樹一, (論文) 「その蛇に翼はあるか—D. H. ロレンス長編小説の題名訳について」, 『経済経営学部論集』, 第1号 (京都先端科学大学), 2020年3月.

山内理恵, (論文) 「D. H. ロレンスとフェミニズム」, 『国際文化学』第33号 (神戸大学大学院国際文化学研究科), 2020年3月.

投稿論文講評

今回は2本の投稿論文があり, 編集委員による審査の結果, 残念ながら掲載論文はなしということになりました. 編集委員会から詳細なコメントが執筆者にすでに伝えられているので, ここでまたくり返すことはしませんが, いくつかについて言及させていただきます.

英語で執筆する際の言葉の使い方にはとくに気をつけるべきだろうということです. とくに意味が幅広いものを使う場合, どのような意味でくだんの言葉を使うのかということを明確にしないと読み手が混乱します. それから比較を行う場合には, その比較素材の選択に整合性をもたせることが必要です. そうでないと比較自体の目的が曖昧且つ恣意的になってしまい, その結果論旨が, 書き手がイメージするように, 読み手に伝わらないということになってしまふと思います.

もうひとつには, 字数制限内でスッキリと直線的に結論までたどり着くということが意外に難しいということです. これはテーマの選択に直接係わることだと思います. あるテーマについて論じる際に作品を援用しますが, 字数制限内に論文を収めようとするとそれが限制的になってしまふ. ひいてはこれがまた恣意的な援用になって, 「どうしてあちらは使って, こちらのエピソードには触れないのだろう」と読み手に思わせてしまう. このような論文を読むと, 「もったいない」と思うことがあります. こんなときには註を利用した

り，先行研究に言及したり，自分の言葉でまとめたり，工夫を凝らしてもらえると解決できるときもあるのではないかと思います。

おふたりの論文ともに興味深い論点が提示されていました。また読ませていただきたいと思います。

(編集委員会)

編集後記

閉塞感に満ち満ちた 2020 年が明けて，抑圧された気持ちを燻ぶらせたまま 2021 年の春を迎えるとしています。会員の皆さんにはさまざまに非常なご苦労を，いろいろなところで，それぞれに体験されたことと思います。コロナ禍で，6 月に計画されていた高知県立大学での大会を開催することができませんでした（おふたりによる研究発表はネット上でありました）。このように，さまざま「できなかった」が世界中に溢れています。

2021 年にはその「できなかった」の数を減らすべく，経験を活かして柔軟な対応がさまざまな局面で求められることになると思います。知恵を集めて，協力し合って事に当たることがいっそう必要になってくるのではないか。このような人間関係が改めて見直されるなかで 2021 年が過ぎていけばと願っています。そして，大会発表や投稿論文の数が増えて，学会活動にもっと活気が溢れることも期待して止みません。

(編集委員長 中林 正身)